

「モロッコ紀行」

第1話・モロッコとはどんな国?

モロッコ王国を一口で言うと、私たち日本人に「異国」を強く感じさせる国である。

最近でこそモロッコの知名度は急上昇しているが、つい先ごろまでは日本人のほとんどが無関心でその所在すらもあやふやであった。

モロッコを知っていますかと尋ねると、映画女優のグレースケリーが嫁に行ったところ？相撲取りがいる国だろう等少なからずの人がモナコやモンゴルと混同していた。

私は映画のカサブランカを見てモロッコを知り、そしていつか行ってみたい国の一つになった。



国土を二分する雪のアトラス山脈

モロッコはアフリカ大陸にある54か国の一つで立憲君主国家である。北アフリカのマグレブ諸国（陽の沈む国）の一角にあり、ジブラルタル海峡を挟んだ対岸はヨーロッパのスペインである。海を隔てモロッコとヨーロッパとの間は僅か14kmしか離れてない。文字通り指呼の間にあり東京湾の久里浜・金谷間とほぼ同じ距離にある。

モロッコはアトラス山脈が国土を二分し、地中海側は温暖で小麦や野菜果物など農作物が豊かに実るが、山脈を隔てた反対側は雨量が極端に少なく荒れ地が多く、やがて果てしないサハラ砂漠へと続いていく。

雨量の多寡は作物の実りを左右し、直ちに国の経済指標に表れる。

人種的には先住民族であるベルベル人とアラブ人で構成されているが混血も進んでいる。人口は3500万人、国土は日本の2倍あり日本との時差は9時間である。

言語はアラビア語やベルベル語であるが、フランスの保護領であった影響であろうか同国を牽引する政治家や経済界のエリート層はフランスで学ぶ人が多く、フランス語はよく通じる。

近年観光や工業化への進展に伴い英語を話す人も多くなり、都市部では旅行者が特に不自由を感じることはない。

モロッコは農業国から観光立国へさらに工業化に向けて、国自体が大きく変身を遂げようとしているところである。インフラや法的整備が急速に進み、物流に欠かせない港湾施設の充実や高速道路網の建設、アフリカで唯一の新幹線を走らせる等、交通網の整備拡充は急ピッチである。加えてホテル建設、さらにサービスと言ったソフト面での充実にも意を注いでいる。近年大きな国際会議開催などモロッコは目を見張る変貌を遂げつつあるところだ。

関心の高い安全性は夜遅く街なかを散策していても不安を感じたことはなく、空港やホテルなどの公の場のセキュリティは厳重で町中を時折警察官が巡回しているのも安心感を得る。

モロッコの歴史を概括すると、紀元前3千年ごろには先住民のベルベル人が住んでいた。隣国チュニジアのカルタゴに拠点を置いたフェニキア人がモロッコを支配していたがカルタゴがローマ軍によって滅ぼされモロッコはローマの属州となる。

ローマ帝国の後半、紀元5世紀半ばの頃には、ゲルマン民族バンダル人によって征服される。6世紀ごろのモロッコは、東ローマ帝国、ゲルマン民族、ベルベル人が分割統治していた。

682年にはチュニジアにアフリカ大陸最初のイスラム都市が建設された。その影響で次第にベルベル人のイスラム化がすすんでいく。

703年にはアラブ人が侵入してきて、モロッコ全土を支配するが、ベルベル人の卓越する指導者マイサラにより解放された。だがベルベル人の諸部族を糾合し国を統一するには至らなかった。

789年モロッコ初のイスラム王朝イドリス朝が成立する。イドリスはイスラム教を興したムハンマドの娘婿のアリーの子孫であるが内乱で敗れ、ベルベル人の母方を頼りモロッコへ逃れてきてベルベル諸部族の後ろ盾を得て、フェズに王都を建設したが王族間同志の争いで滅んでしまう。

11世紀にはサハラ方面のベルベル系の遊牧民がムラービト朝を興し、都をマラケシュに置きジブラルタル海峡を挟んだヨーロッパ文化との交流を推し進めた。

そして同じベルベル系のムワッヒド朝がスペインのアンダルース地方を占拠し支配したが13世紀に王朝は崩壊し領土は分裂した。

次いでベルベル系の遊牧民がフェズに都を定め新しい王朝「マリーン朝」を打ち立てた。この頃からモロッコへアラブ人がやってきてイスラム化が一層進む。マリーン朝は首都フェズの住民の暴動によって滅んでしまう。

16世紀半ばサアド朝が興った。サアド家はアガディールに拠点を築いたポルトガル軍を破り領土を奪い返したことによって信望を集めた。そして16世紀末には王朝の最盛期を迎えたが、スルタン・マンスールが没し諸勢力が対立することとなった。

イスラム教を開祖した予言者モハメッドの家系に繋がる現王朝のアラウィー家が17世紀末モロッコを統一し、メクネスに都を定めた。

19世紀モロッコはフランスとの戦いに敗北し、さらにスペインとも紛争が絶えず、結局1912年フ

ランスの保護領となる。

スルタンはフランスから地位と権威は与えられ自治権は確保したものの、外交や軍の指揮権はフランスに握られた。フランスのリヨテ総督はモロッコの首都を現在のラバトに定めた。

余談ながらこの頃の世相は映画「カサブランカ」にも描かれている。モロッコはユダヤ人に対し友好的で、ナチス政権下でのフランスのビシー政権のいうままにならなかった。

1956年スルタンのベン・ユーセフによってモロッコは独立した。ベン・ユーセフはスルタンの呼称を王に改め、自身はムハンマド5世と称した。しかし独立後5年を経て急死してしまう。次いでハッサン2世が王となり、その没後長男のムハンマド6世が国王に即位し現在に至っている。

モロッコ人の日常生活の規範はイスラムの教えである。全世界のキリスト教徒は21億人、仏教徒は4億人、イスラム教徒はキリスト教に次いで多く16億人いると言われている。

イスラム教はスンニ派とシーア派の2派ある。信徒の90%はスンニ派である。現在アメリカとの紛争中のイランはシーア派によって占められている。

両派の違いは後継者の選び方にある。シーア派はモハメッドの血縁に繋がる人物を、スンニ派は血統より実力を重視し後継者を選んでいる。モロッコ王国は国民のほとんどすべてがイスラム教のスンニ派である。

イスラム教には5行が定められている。5行とは信仰の告白、礼拝、喜捨、断食、メッカへの巡礼である。

モロッコを旅していると、イスラム教徒に礼拝を告げる男性の朗々たるアザーンの響きは、時に心地よく厳かに、時に物悲しく聞こえ、人を感傷的にする。

日本人の日常生活にないものの一つにラマダン（断食月）の行がある。ラマダンは毎年巡ってきて一か月続く難行である。

ラマダンに入るとイスラム教徒は、病人妊婦外国人は対象外とされているが日の出から日没までの間、飲食喫煙を一切絶たねばならない。断食は日没をもって終わるが夜は喉の渇きや空腹を満たすため家族がそろって賑やかに食卓を囲む。

メッカ巡礼はイスラム教徒の義務であり生涯の願いである。だがサウジアラビアのメッカへの旅は誰でも行けるわけではない。費用が掛かり大きな負担に耐えられる人以外は難しい。

日本の世界史にも記述があるが、14世紀にモロッコ人のイブン・バットゥータというイスラム教徒の大冒険家がいた。

彼は車もない航空機もない時代にメッカ巡礼を果たし、さらに旅を続け30年間で3大陸50か国12万km（地球3周）を踏破したのである。

その足跡はアラビア語で書かれた大部の紀行文に記述され、17世紀にヨーロッパ各国で翻訳され広く知られることとなった。面白く大変興味深い記録である。

モロッコは経済的には順調な歩みをたどっているが、西サハラ地域に領土問題を抱えている。隣国アルジェリアの支援の下、ポリサリオ（武装政治組織）は西サハラを“サハラ・アラブ民主共和国”とし独立

を宣言した。だが日本を含めて国連の大部分は西サハラの独立を認めていない。

陽いずる国日本、陽が沈む国モロッコ、両国には共通点も多いが日本にはない仕来り文化が沢山ある。

隔靴搔痒拙い文書であるが彼の地「異国」について何話か取り上げ紹介してみたい。